







俺は秋山達郎。対魔忍として姉の凜子姉とこの学園に任務で潜入している。どうやらこここの生徒が何か不可解な事件に巻き込まれているというこことらしいが、未だその尻尾を掴めないでいた

しかし、俺はその任務よりも重大な覚悟を決めようとしていた。

(今日こそ凜子姉に告白しよう——！)

「あっ凜子姉！その、今日一緒に帰らない？  
ちよつと寄りたいたいところがあつてさ……！」



「ん、達郎か。どうしたの？急に改まって。  
多少なら寄り道も別に構わないぞ。」

（やった！凜子姉を誘えたぞ！  
あとはあのデートスポットに誘えば――）







「おや秋山さん。今からお帰りですか？」

声の主は、今回の任務で潜入しているこの学園の校長だ。

禿げ上がった頭に、でっぷりとした腹。おまけに舐めるような視線で凜子姉を見つめる。

「はい。今日はたまたま弟と鉢合わせたので、一緒に帰ろうかと。  
さようなら、校長先生」

いやらしい視線を向ける中年に笑顔で会釈をし、  
二人でその場を立ち去ろうとした瞬間――





パチン——。

突如周囲の光の色が変わる。  
夕焼けのオレンジに染まっていた廊下は、ホテル街の下卑たネオンのようなピンク色に染まっていた。

（か、体が動かない——！）

状況を確認しようとして、唯一動く眼球で視線のみを向けると、  
つかつかと校長が凜子姉に近づいているのがわかった。





「いけないなあ達郎くん。

潜入捜査するならまず相手の力を推し測らないと。

私はこの学園内の全てを意のままに操ることが出来るんだよ。

こうやって君の身動きを封じることにも造作もない。

それに、こうして動きを止められるのは初めてじゃないんだよ。昨日も一昨日も。

君は私の能力で動きを封じられてたんだ。

まあ、記憶を操作したから、覚えてないだろうけどね。」

そう言うのと校長は凜子姉の後ろに立ち、何やら耳打ちする。  
すると――





するり。姉のスカーートを捲り上げ、尻を揉み上げ始めた。

「あん♥校長先生♥今日もお尻ばっかり触って♥」

今日も。

凜子姉は確かにそう言った。

昨日も一昨日も。

俺が覚えていないだけで、こんなことが毎日行われていたというのか——？

驚愕する俺に目もくれず、校長のセクハラはエスカレートしていく。





こんどは、催眠の効果なのか、調教の成果なのか、もう完全に勃起し切った乳首を捏ね始める。

「凜子ちゃんはコレされるのが好きなんだよなあ♡」

「ああん♡好き♡スキスキ♡大好きです♡  
校長先生に調教して貰って、こんな服の上からでも形がわかる様な変態乳首になっちゃったんですよ♡」

やめる、やめてくれ。大切な人が目の前で催眠状態になり、好き放題されるのを、俺は見ていることしか出来なかった。





信じられないことに、今度は凜子姉の方から、校長への奉仕を始める。  
校長の勃起した怒張を、ズボン越しにカリ♡カリ♡と刺激し始めた。

「如何ですか？校長先生♡」

「凜子くん、なかなか上手くなってきたじゃないか♡」

凜子姉の顔をベロベロと舐めまわしながら、凜子姉の奉仕に気を良くした校長は、何やら耳打ちを行う。

「ふふ、はい♡」





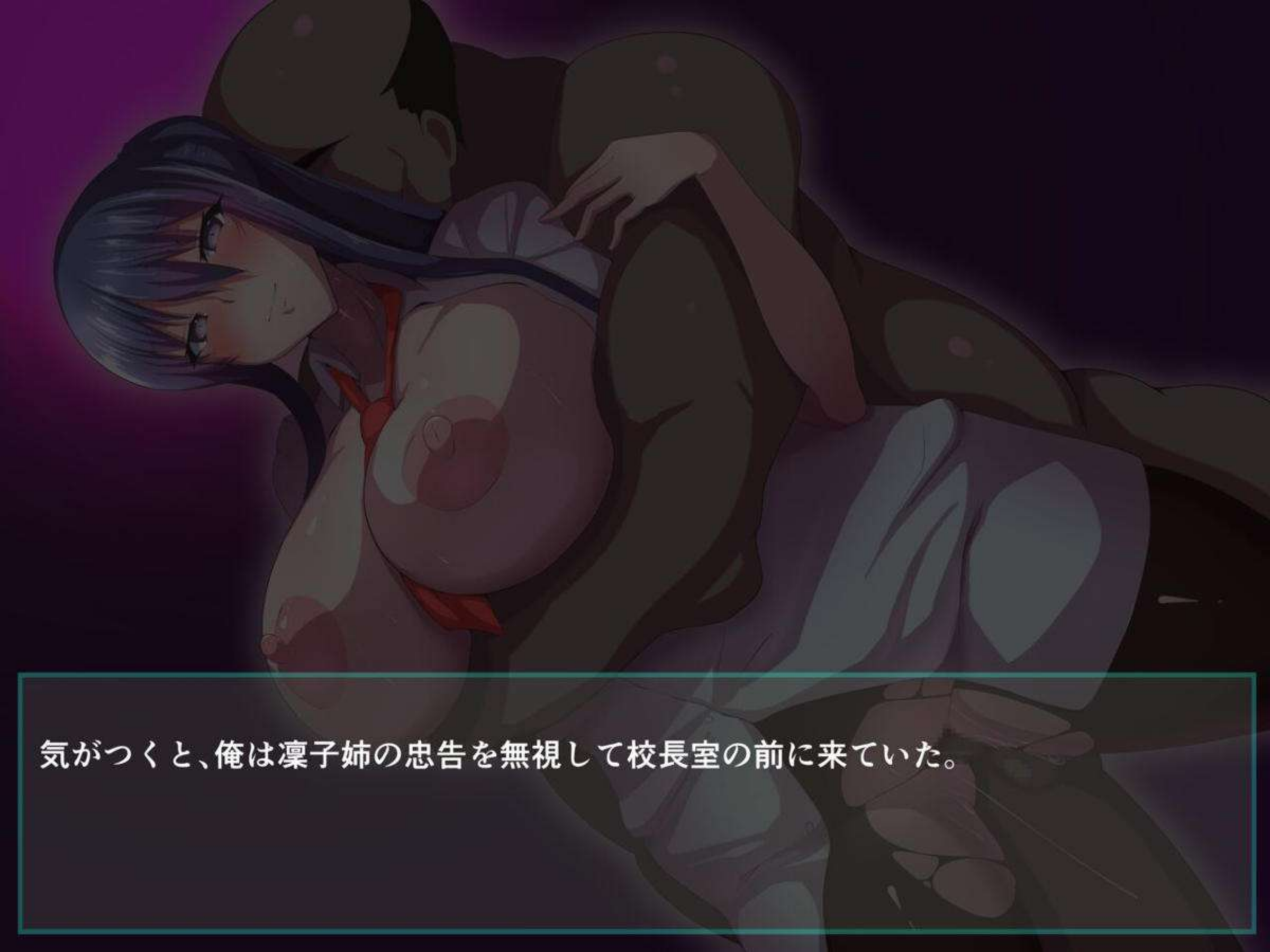
「達郎。今日一緒に帰ると言ったが—  
あれは取り消す。もっと重要な『任務』が出来てしまった♡」

「校長先生と少し話があるから、先に帰っててくれ♡  
二人で校長室に向かうが—、くれぐれも、『覗きにきたり、してはいけない』ぞ♡」

凜子姉は妖艶な笑みを浮かべながら俺に忠告をしたが。  
答えなど、もう決まっている。

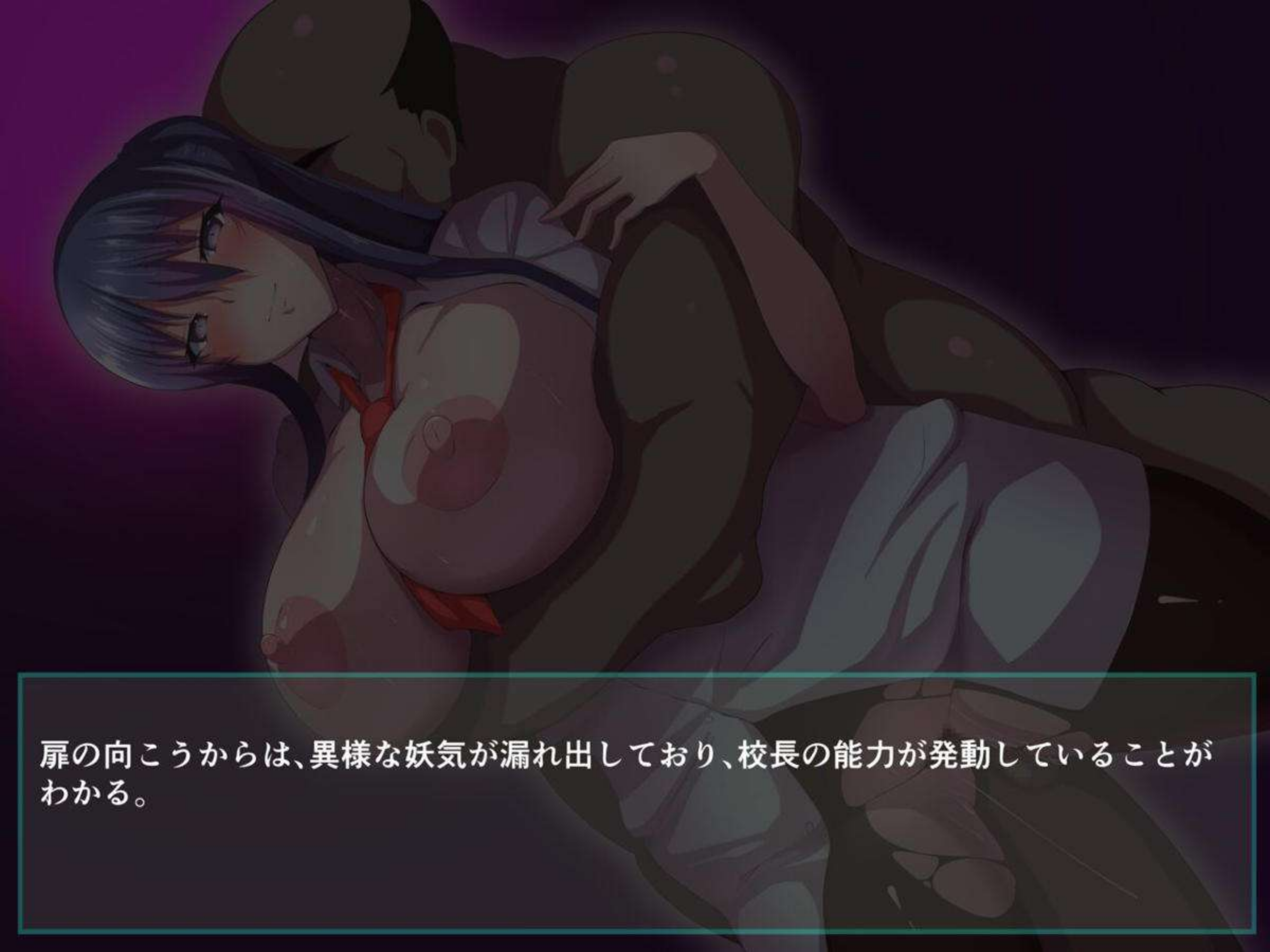
そう、これは、校長先生から寝取られマゾの俺へのプレゼントなのだ。  
先ほどまで動かなかった体はスムーズに校長室の前まで動いた。  
これは催眠の効果か。それとも俺の意思か。  
どちらにせよ、俺に出来るのは、せいぜい姉の痴態で  
この鬱勃起を納めることくらいだ—





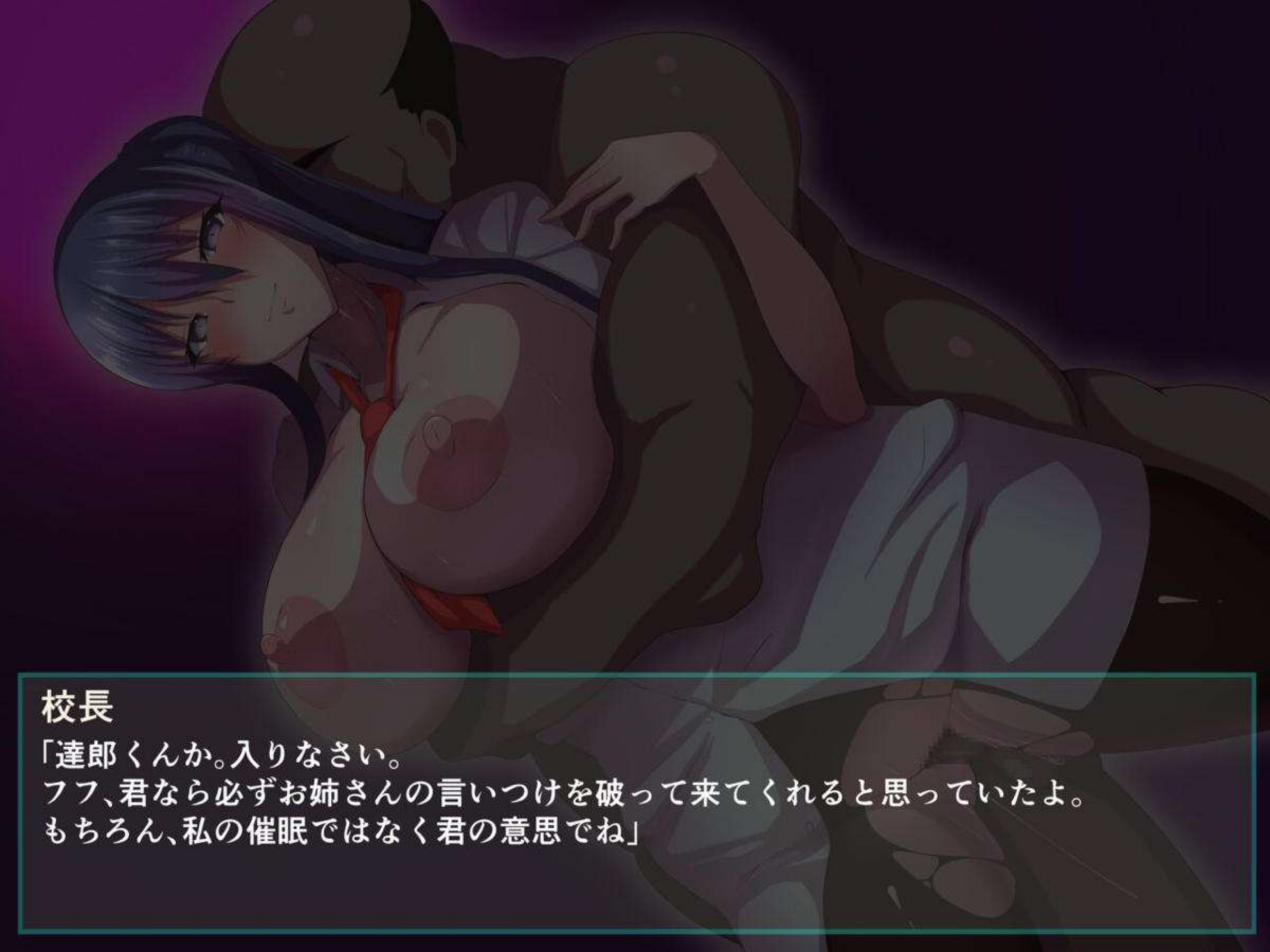
気がつくと、俺は凜子姉の忠告を無視して校長室の前に来ていた。





扉の向こうからは、異様な妖気が漏れ出しており、校長の能力が発動していることがわかる。





校長

「達郎くんか。入りなさい。  
フフ、君なら必ずお姉さんの言いつけを破って来てくれると思っていたよ。  
もちろん、私の催眠ではなく君の意思でね」





校長に促され、校長室に入る。

これから目にする姉の痴態への予感に熱を持った頭と、絶望と恐怖でじとりと汗ばむ手のひらには、金のドアノブはやけに冷たく感じられた。重い木製の扉を開く。





## 校長

「ようこそ達郎くん。

ではご足労いただいたことだし、早速君のお望みのショーといきますか。

だが、ただ目の前で犯されるお姉さんを眺めるだけではつまらんだらう？

そこで、今日から君に重要な役割を担当してもらおうと思う。」





## 校長

「君のお姉さん、——凜子は、私の催眠が発動している間、この学園内の『備品』として私や、私の関係者の求めるがままに身体を差し出すようにしてある。君には、凜子の痴態をこのカメラに納め続けてほしい。つまり、元対魔忍秋山凜子の、学園モノAVを撮影する手伝いをしてほしい。」





姉を人質に取られた俺は、校長から手渡されるビデオカメラを受け取るしかなかった

。





校長

「承諾していただけて助かるよ。  
じゃあ早速、今日の撮影を始めよう。  
凜子ちゃん、カメラマンくんに向かって今日のサブタイトルコールをしてみよう。」





凜子

「——はい。

『学園奴隷調教 ～元対魔忍は学園のドスケベ備品♥～

CHAPTER 1、校長先生のねっとりピストン』

始めさせていただきます。」





目の前の最愛の姉は、淡々と、しかし発情し、媚び切った声で後ろ抱きにする校長に撮影開始を宣言する。





## 凜子

「このチャプターでは、元対魔忍の秋山凜子が、校長先生にねっとりと膣コキ奉仕をさせていただきます。

では校長先生、備品オナホマ○コ、むっちむちとろとろに準備出来ていますので、おチ○ンポで奥まで穿ってください♥」





校長

「よし、じゃあこのまま立ちバックでハメるからな♥」





ぬちぬちぬち♥

クロッチ部分を破り開けられたタイツから覗く、準備万端の女性器に、校長の怒張が押し当てられる。





凜子

「あふ、うん♥」





ワレメに少し亀頭を擦り付けられただけで、ピンク色の嬌声を上げ、全身を震わせる。





校長

「フフフ、素股だけでもうイキそうなのか？  
まあ快楽を向上させる催眠は多少掛けているが、それにしても感じすぎだろう♡  
やはり私が見込んだだけのことはある♡」





凜子

「は、はい♡

申し訳ありません♡

でももう、さっきの廊下でお尻とおっぱい、いじって頂いて♡

もう発情マ○コ、我慢できないんです♡♡」





校長

「フフフ♥

これは今後もっと調教してやらんとな♥

まあいい♥今日のところはハメてやるぞ♥

おい達郎くん、ちゃんと記録しておいてくれたまえよ♥」





ぬち♥ぬちゅぬちゅ、ん♥♥

赤黒い校長の亀頭が、とうとう桃色の果実に割り行っていく。  
ゆっくりと、肉ひだの一つ一つを肉棒全体で味わうように挿入していく。





長大な校長の怒張を根元まで啜え込むころには、下から圧迫される子宮の負担を減らすため、挟り込む男性器から少しでも逃げようと爪先立ちになっていた。





凜子

「~~~~~ツツツツ♡♡♡」





声にならない絶頂の嬌声が、校長室に響き渡る。  
校長はすぐには挿入した怒張を抽送しようとはせず、押し広げた膣道にその形を覚えさせるようにゆっくりと腰をグラインドする。  
その度に、凜子姉の体は少しでも快樂から逃れようとくねくねと艶やかに踊る。





凜子

「っ♡♡、っはあっ♡  
おうっ♡くう♡」





男性器に持ち上げられた子宮によって支えられた身体を校長の方へもたれかからせ、辛うじて立っていた。

爪先立ちの脚はガクガクと震え、足元に愛液と汗の水溜まりを作り始めていた。





校長

「もうイキっぱなしですね♡

先ほどからちゅっちゅ♡と私のチンポに吸い付いて♡

そろそろおまんこも私のカタチを覚えた頃でしょうか？

では次の段階に——」





次の段階に移る、という言葉とともに大きく腰をひく校長。  
ずろろ♥と、たっぷりと蜜液を絡めた男性器が姉マ○コから引き抜かれる。  
亀頭の根元が見えるか見えないかのところまで引き抜かれた後——





どぢゅっん♥♥♥♥  
根元まで再び一気に挿入される。





凜子

「~~~~~ツおツツツツ♥♥♥♥」





子宮を校長のチ○ポに一気に抉り潰された姉は、耐えきれず絶頂潮を噴き上げてしまい、正面でビデオカメラを構えていた俺の顔に潮がかかる。





校長

「うむ、ピッタリと吸い付いて、わしの子種を吸い上げようとしおる。  
このまま動くからな♥」





凜子

「は、はひ♡♡

おねがいひまひゅ♡♡」





どちゅん♥ぐちゅん♥ずちゅ♥ばちゅん♥  
深く腰を引き、奥まで突き入れる。  
その度にぴしゃっと潮を噴き、俺とカメラを汚していく。





校長

「凜子くん、そういえばキミ、さっき廊下では『用事があるから帰る』と言っていたが——、なんの用事だったのかね？」





不意に校長が話題を出す。  
もちろん、俺の一世一代の告白も校長には筒抜けだったようだ。  
それまでもこの陵辱劇のスパイスにしようと言うのだ。





凜子

「おっ♥んんっ♥

あっ、あれはあっ♥このカメラマン、のっ♥私の弟、秋山、達郎とっ♥

いっしょにかえっ♥るってえ♥

やくひょく♥ひてたんれふ♥♥」





校長

「成程成程♥

それは姉弟水入らず、いえ、もっと別の感情が混じった時間をお邪魔してしまっ♥  
申し訳ありませんでした♥」





凜子

「あッ♥ああっ♥

い、いえッ♥いいんですっ♥

校長先生のッおち○ポの方が大事ッ♥ですッ♥

それにッ♥達郎もッ♥私と校長先生のSEX見てっ♥こうふ、っん、してますからあ♥」





校長

「おやぁ♥本当だな♥

愛の告白をしようとしていた最愛の姉が目の前で犯されるところをビデオで撮らされながら、無様に勃起しておるなあ♥♥」





校長に指摘され、気がついた。  
正座しながらビデオカメラを構えていたが——。  
正座で揃えた太ももの間に、テントが張り詰めていた。  
最愛の姉の痴態で、どうしようもなく興奮してしまったのだ。





校長

「ハハハハ！

血は争えんな！

凜子が子宮を潰す勢いのピストンでイキ乱れるドM対魔忍なら、弟の達郎くんは姉を寝取られて興奮する寝取られマゾとは！」





校長の下卑た笑いに晒され、姉からピストンの度に潮を噴き掛けられ。  
俺のマゾ性感は完全に覚醒させられ、パンツの中を先走り汁で汚してしまっていた。





そうこうしているうちに、校長のピストンが加速し、フィニッシュに近いことを悟らせる。





校長

「凜子、そろそろイクぞ！  
子宮の奥でしっかり受け止める！  
校長精液で対魔忍卵子集団レイプだ！」





凜子

「おっ♥おあっ♥

イク♥♥イク♥イクイクイク♥♥

イッ~~~~~♥♥♥♥♥





どびゅっ！ぶびゅるっ！ずぎゅぶるるるうううう！  
確実に音を感じるほどの激しい射精が、姉の子宮の奥に叩きつけられる。  
プシっ！プシャあああああッ！  
姉は、唇を噛み締めながら、一際大きなイキ潮を俺に向かって撒き散らす。





そして俺は、姉の屈服潮を頭からかぶりながら、パンツの中で射精していた。





校長

「ふー、よく出たよく出た♡」

「達郎くん、撮影データの共有と後片付け、よろしくね♡」





隣には、校長の精液を膣口から溢れさせながら放心する姉。  
今の俺には、この状況を打開する術はないが、せめてこの姉の傍にいよう。  
この学園に囚われた俺たち姉弟の絶望の学園性交は、まだ始まったばかりだ——。





凜子

——達郎——。

カメラの準備は、もうできているか？





俺の姉。  
幼い頃から親代わりに俺を育ててくれた強く優しい姉。  
その姉が今、俺の目の前に、俺の構えるカメラの前に、その美しい肢体を晒している。





狗山

「おう、秋山。  
ちゃんと撮れてるんだろうな？  
イケメンに撮ってくれよ！なんてな！ワハハ！」





姉の肩を抱きすくめ、豪快に笑うこの男は、狗山。  
この学園の体育教師だ。  
体育教師ではあるが、金髪に中年太りの腹をぶら下げた、不快な男である。





姉は今からこの男に抱かれる。  
というのも、俺と姉のこの学園への潜入は催眠能力を持つ校長に筒抜けであり、現在姉は校長の催眠によって学園の都合の良い所有物になっている。  
姉は一時的に校長から狗山に貸し出されている、というわけだ。





狗山

「よし、凜子。  
これから撮るプレイの内容を、カメラマンさんに教えてやれ♥」





凜子

「はい♥それでは——

今回撮影するのは『学園奴隷調教』 ～元対魔忍は学園のドスケベ備品～  
CHAPTER 2、体育教師のマンズリスクワット調教、です♥」





狗山

「よしよし♡

やっぱり最高の女だ。校長が墮としたっていう元対魔忍美少女♡

今から俺の調教でそのクールぶった顔をグズグズの発情顔に変えてやるからな♡」





凜子

「ふふ、はい♥  
ではさっそく始めさせていただきますね♥」





ソレを聞くやいなや、狗山はこの夕暮れの宿直室の床に座り、性器をぶるん、と露出させる。赤黒く、血管の浮き出たソレは、校長のモノほど大きくはないが、断崖のように張り出したカリの存在感が目の前の牝を威圧した。





凜子

「おっ…大きい、ですね…♡

それ、では——マンズリスクワット、始めさせていただきます——。」





凜子

「いーち♥」





ブルマの体操服に身を包んだ姉は、両手を頭の後ろに回し、蹲踞の姿勢で狗山の下半身を跨ぐ。そして、狗山の性器にクロッチ部分を擦りつけるようにゆっくりと腰を上げていく。





狗山

「どうだ、凜子♥

校長に感度上昇の催眠をかけてもらってるからな、俺のチ○ポにひと擦りするだけでフツーの女なら腰が砕けて立てなくなるんだが——。

感じはするが、イキまではしないってか♥」





凜子

「は、い♡

元対魔忍の矜持にかけ、て♡

限界まで耐えさせて、頂きます♡」





催眠の中でも、姉は自身が対魔忍であることを覚えていたようだ。  
いや、校長の趣味で、対魔忍という記憶はそのままに、調教によって墮として  
やろうという魂胆なのかもしれない。





凜子

「に、い♡」





凜子

「さー、っん♥」





凜子  
「よーん♡」





凜子

「ごーお、つくうふん♡」





ビクン、と全身を震わせ、その場にへたり込む姉。  
チ○ポからクロッチが離れたことで、ぬちゃり、と光る愛液の橋がかかる。  
紺のブルマにはじわり、と濃いシミが出来始めていた。





ビクン、と全身を震わせ、その場にへたり込む姉。  
チ○ポからクロッチが離れたことで、ぬちゃり、と光る愛液の橋がかかる。  
紺のブルマにはじわり、と濃いシミが出来始めていた。





狗山

「ワハハ！威勢のいいこと言う割には、随分早漏ちゃんだなあ！  
でもわかるぜえ♥今のは俺のかりにクリが擦れちゃったんだよなあ♥  
無意識に避けてたみたいだが、偶然当たっちゃったのか、それとも我慢できずに自分から擦っちゃったのか？」





凜子

「ひ、ひちゅれい、ひまひた♡  
狗山先生のかり、気持ち良すぎて♡  
軽くイ、って、ひまいまひた♡♡」

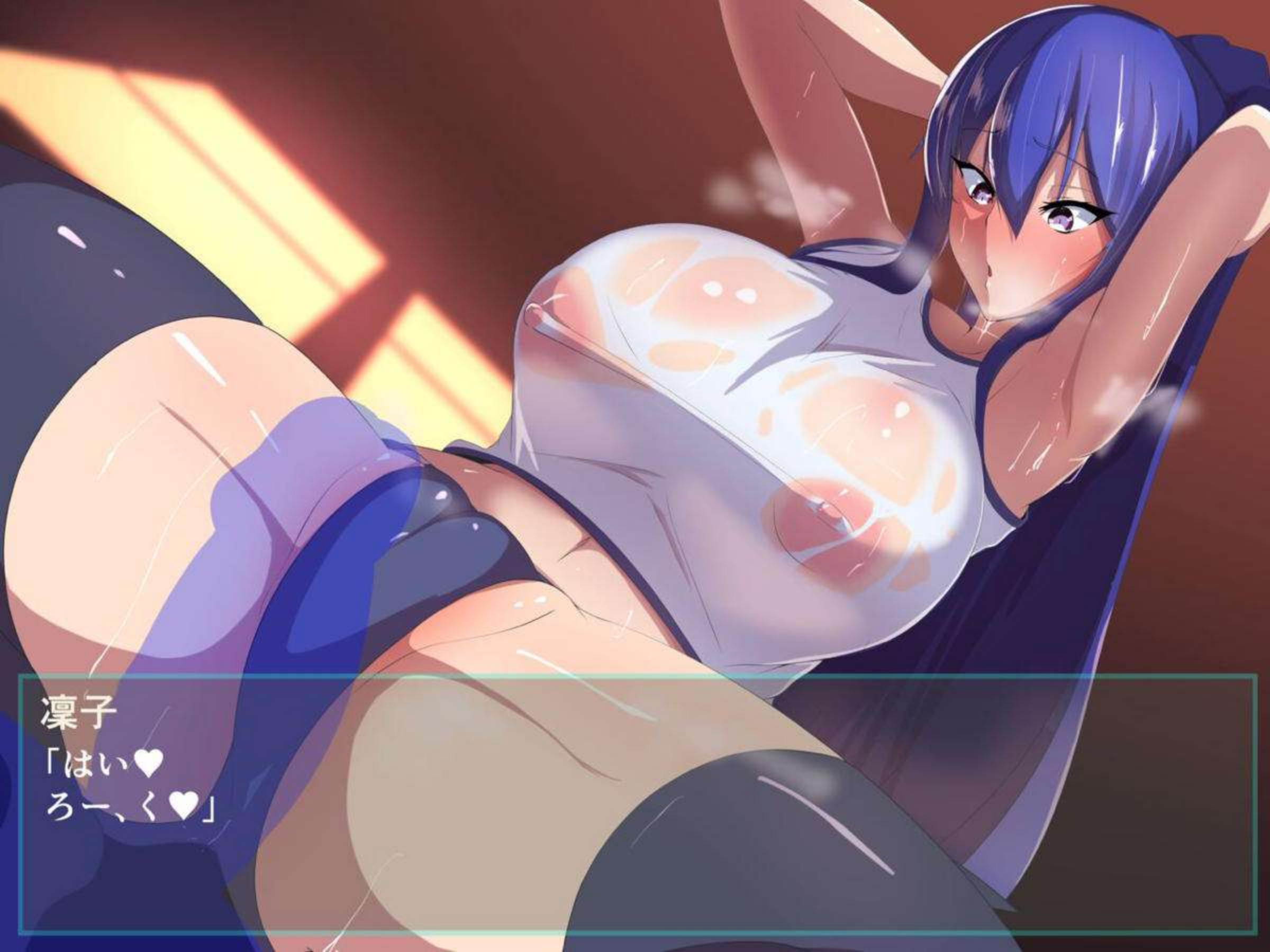




狗山

「フフ、でも俺はまだまだ満足してねえからな♥  
ドスケベスクワット再開だ♥」





凜子

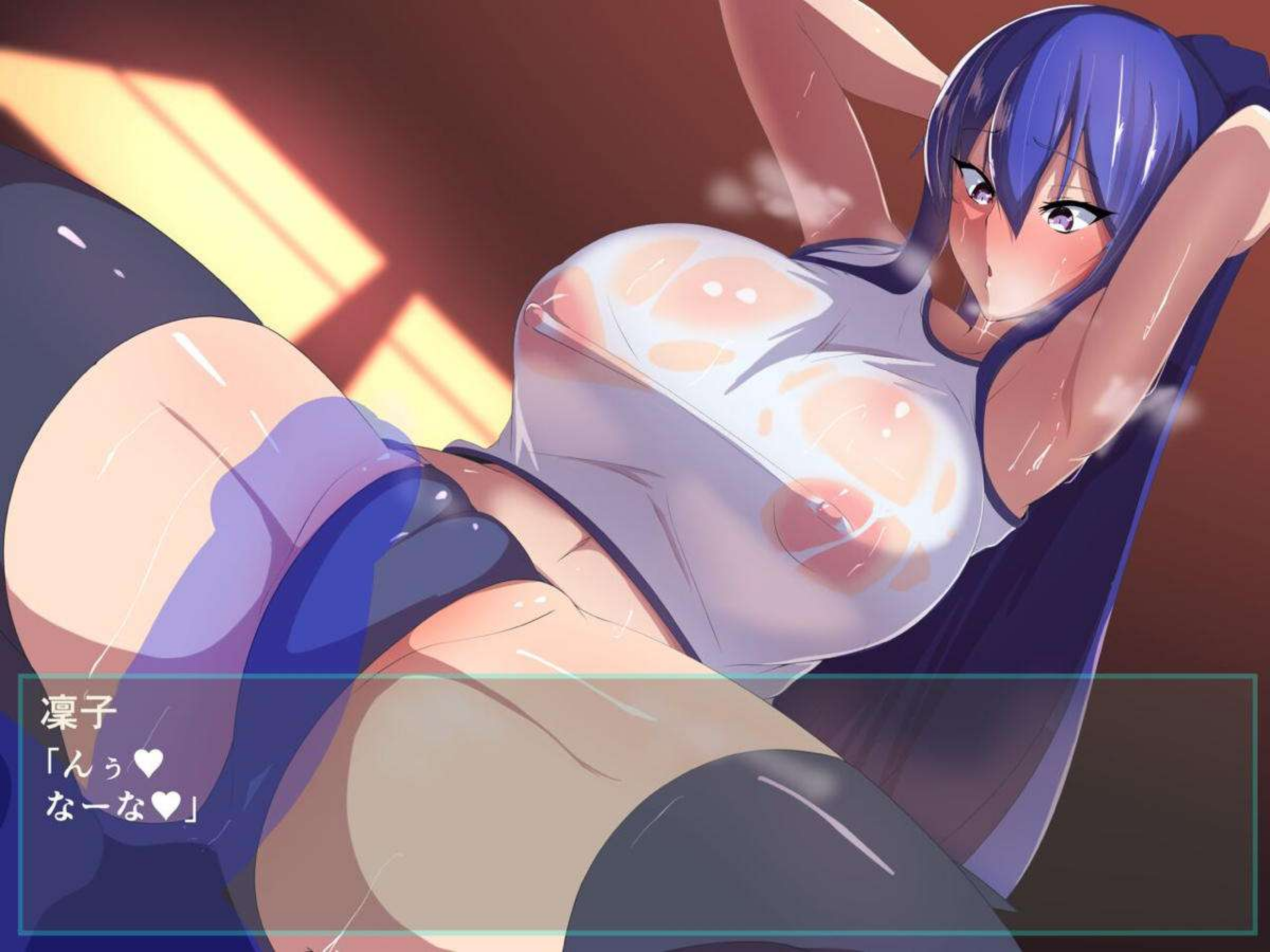
「はい♡  
ろー、く♡」





下品なスクワットが再開される。  
ゆっくりと、素股でチ○ポに奉仕する様に腰をグラインドさせる姉。  
それをバッチリと録画しながら、俺のチ○ポも限界の硬度を保ち続けていた





凜子

「んう♡

なーな♡」





凜子

「んう♡

なーな♡はーち♡きゅーう♡」





くちゅ、くちゅ、と擦りつける度に水音が大きくなっていく。





凜子

「ふっ♡ふーっ♡

じゅーうっ♡♡」





凜子

「はっ♥はっ♥

狗、山先生♥そろそろ、チ○ポをこのマ○コに、入れたくない、か♥  
狗山先生の頼みなら、このまま、してもらっても、いいのですが♥」





狗山

「いやいや、別に俺は結構だよ♡  
欲しいのは凜子ちゃんの方だろ？」





凜子

「う、うう♡

その通り、です♡

変態マゾマ○コ、ドスケベマンズリで発情しきっちゃってますう♡





カクカク、にちゃにちゃ。  
姉の動きは、もうスクワットの体をなしてはいなかった。  
ただ目の前の肉棒に性器を擦り付け刺激する、オナニーと化していた。





体育倉庫中に甘酸っぱい牝の匂いを充満させながら、懇願する姉。





狗山

「ははは！もうなりふり構わず発情本気後尾誘惑モードってわけだ！  
初めのクール面からは想像もつかねえなあ！」





そういうと、狗山は姉の動きに合わせて腰を振り始める。





狗山

「じゃあおれがオナニーのお手伝いしちゃうかな〜♥」





凜子

「ふおおおおおっ♡♡

ダメッ♡ダメです狗山先生えッ♡

ごりゅ♡って、マン肉下からほじられたらぁ♡」





凜子

「いっいいいっ♡

イク♡イクイクイクイク♡

いっくううううううう♡♡♡♡





凜子

「はあ、はあ♥  
イって、しまいました♥  
申し訳、ありません♥♥」





狗山

「おやおや、一人で派手にイッちゃって♡  
でもまだ俺は満足出来てないなあ♡  
よし、じゃあ続きは、宿直室で、な♡  
秋山も来い。ここからが本番だぞ♡」





凜子姉に対する狗山の焦らし調教は、始まったばかりだった——。





体育教師の狗山は、凜子姉と俺を体育倉庫に招き入れた。  
カビと汗の匂いの充満した体育倉庫に、先ほどまでのスクワットと称した素股で  
発情し切った甘酸っぱい牝の匂いが加わり、狗山と俺の雄を刺激する。





狗山

「よし、じゃあここで『本番』シーンの撮影といくぞ。  
秋山、カメラの用意は出来てるんだろうな。」





今から、俺は姉とこの下衆な体育教師のセックスをビデオカメラに納め続けなければならない。

潜入任務に失敗した俺は、校長の催眠能力によって凜子姉を人質に取られ、姉の「学園催眠NTRビデオ」を自ら撮影することを強制されているのだ。





狗山

「一瞬でも撮り逃しやがったら凜子を男子便所に括り付けて1ヶ月便女当番の刑にしてやるからな」





凜子

「ふふ、いい考えですね、狗山先生。  
特に体の大きいラグビー部や柔道部の生徒がよく利用するトイレがいいです♡  
屈強な雄のカラダに捻じ伏せられるの、自分が一匹の牝だって実感できて最高なんですよ♡♡」





校長の催眠によって、常識や記憶まで改竄された姉は、恍惚とした表情で『ペナルティ』の内容に期待の声を上げる。  
以前の強く優しい凜子姉では考えられないようなその言葉に、姉を奪われているという実感がじわりと湧き、焦燥と仄暗い興奮が俺を襲った。





そして姉は跳び箱に手をつき、自身の片足を上体の側面にまで持ち上げ抱える体勢、つまり「I字バランス」のポーズをとり、狗山を誘惑する。





凜子

「狗山先生 え♡

凜子は、さっきのマンズリスクワット勝負で先生に完敗してから、おま○こホカホカトロトロに準備万端なんです♡

だから——」





凜子

「この騷のなっていないバカま〇こ、先生のガチガチ体育教師チンポで騷けて下さい♥」





狗山

「ぐふふ、よく言えたな♡  
だが、すぐにはチンポは挿れてやれんなあ♡」





狗山は屹立した剛直を挿入はせず、入り口のあたりを焦らすようにチンポでの愛撫を始めた。





凜子

「はあん♡

狗山先生♡意地悪です♡

じゃあ、どうすれば奥までカキ回して頂けますかぁ♡」





狗山

「そうだなあ♡  
いまここで、カメラマンの秋山達郎くんに「謝罪」してもらおうか♡  
内容は——」





狗山は「謝罪」の内容を何やら姉に耳打ちする。  
内容を聞いている間、凜子姉はこちらに視線を向け、妖艶な笑みを浮かべながら小さく何度か頷く。





凜子

「はい、わかりました♡  
では——♡」





凜子

「すまない達郎♡

これまで姉として、真面目ぶって厳格に接してきたのに♡

頭もマンコもゆるゆるのバカ牝ですまない♡♡」





凜子

「私は最低な姉だ♥

自分の快樂のために♥狗山先生に媚びるために♥

たった一人の弟を快樂を得るための手段にしてしまおう、脳みそ真っピンクのバカ牝  
なんだ♥」





凜子

「どうか許して欲しい♡

これも、狗山先生のぶっとい中年チンポでバカ牝躰けてもらうためなんだ♡

だからこのまま私が狗山先生の、このおチンポのお嫁さんにされちゃうところ、「し  
っかりそのカメラに収めてくれ♡♡」





狗山

「よく言えたな♥

秋山、どうだ？お前の寝取られマゾチンポ勃ってきたんじゃないか？

ちょっと見せてみろ！」





狗山に指摘された通り、俺のチンポはもう射精寸前までイキリ勃っていた。  
本来なら考えられないことだが、ここで狗山に逆らえば姉に何が起こるかわからない。  
俺は狗山の言う通り、その場でズボンとパンツをおろし、性器を露出させた。





狗山

「ワハハハハハ！

見る凜子！お前の弟は真性の寝取られマゾだな♡

姉にあんなこと言われて、マゾチンポピンピンにおっ立ててやがるぞ！」





凜子

「フフフ、本当に。  
でも、低層観念ゆるゆるのバカ牝姉に、寝取られマゾの弟。  
最高の取り合わせではないですか？♥」





狗山

「それもそうだ——なッ♡」





じゅぶんッ♥♥♥

狗山は凜子姉のマ○コに一気にその剛直を挿入し切る。





凜子

「んおおおおおおおおおおツツツツ♡♡♡♡!？」





雷に打たれたように体を痙攣させながら上体を仰け反らせるあね。  
開脚した股間からは、ビチャビチャ♥と潮が噴き上げられ、体育倉庫の床に雌液の  
水溜まりを作る。





奥の感覚をしばらく堪能した後、狗山はずるる♥とチンポが牝穴から抜ける寸前まで腰を引く。  
まるでバキュームフェラ中の唇のように、名残惜しそうにマン肉が引きずられる。





姉は一気に挿入された快樂に目を白黒させる。





そして——  
どちゅんッ♡♡





凜子

「んおあああああっ♡♡♡」





もう完全に狗山にペースを握られた牝姉は、カメラを構える俺には目もくれず、狗山がチンポを突き入れるたびに潮を吹き散らし、壊れたおもちゃのようにイキまくる姉を、俺は撮り続けるしかなかった——。

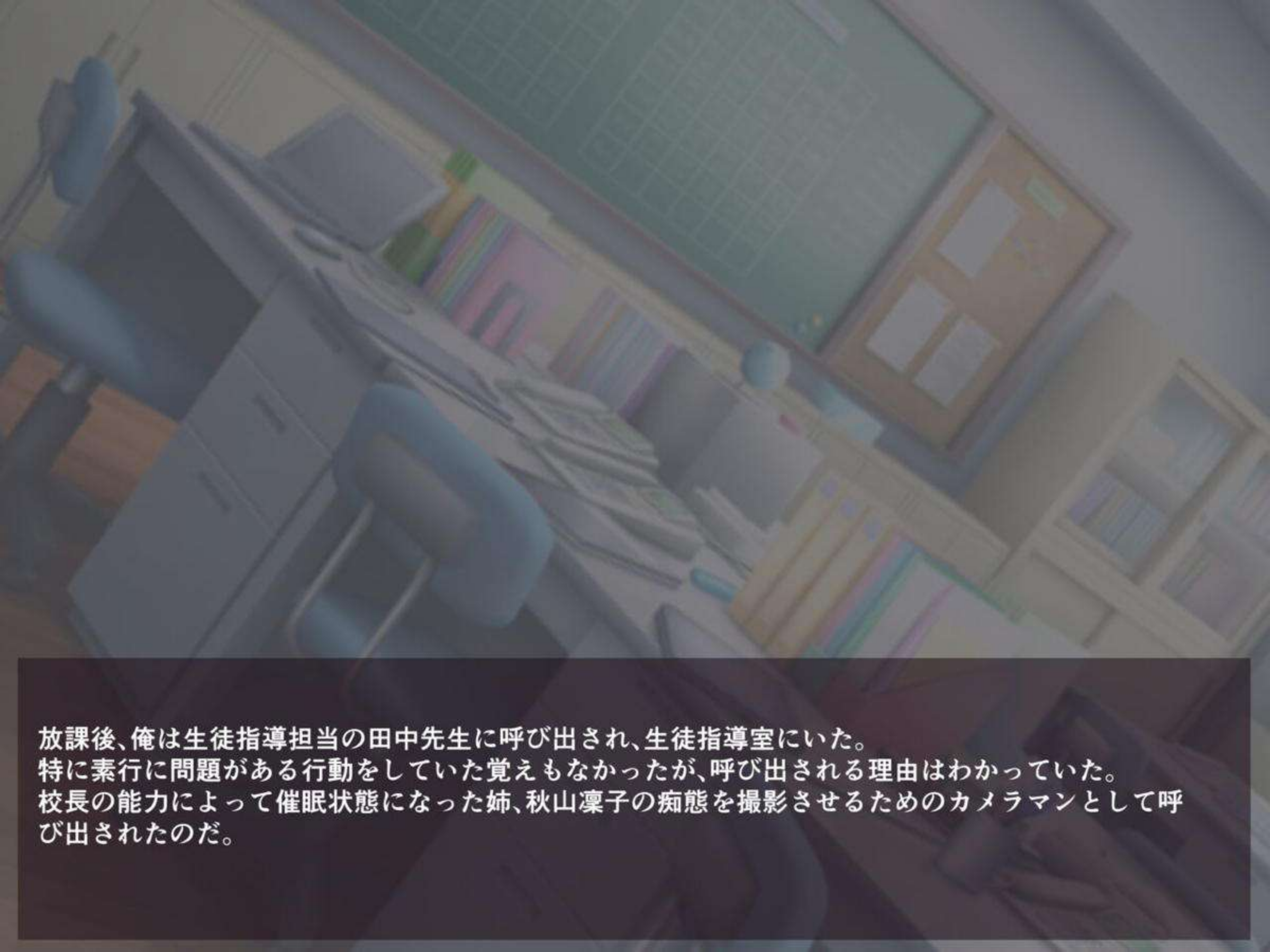


A dimly lit classroom with a desk, chairs, and a chalkboard. The scene is viewed from an elevated perspective, showing a desk with a computer monitor and a chair on the left, and a chalkboard at the top. The room is filled with various items like books and papers, creating a cluttered but organized environment. The lighting is soft and somewhat muted, giving it a quiet, perhaps slightly somber atmosphere.

田中

「秋山ァ、今日お前がこの生徒指導室に呼ばれた理由、分かるか？」



A dimly lit classroom with a desk, chair, and a chalkboard. The scene is viewed from a high angle, looking down at the desk and the chalkboard. The lighting is low, creating a somber atmosphere. The desk has a computer monitor and some papers. The chalkboard is green and has some faint writing on it. The room has a wooden floor and a door in the background.

放課後、俺は生徒指導担当の田中先生に呼び出され、生徒指導室にいた。特に素行に問題がある行動をしていた覚えもなかったが、呼び出される理由はわかっていた。校長の能力によって催眠状態になった姉、秋山凜子の痴態を撮影させるためのカメラマンとして呼び出されたのだ。



A dimly lit classroom with a desk, chairs, and a chalkboard. The scene is viewed from a high angle, looking down at the desk and the chalkboard. The lighting is soft and somewhat muted, creating a quiet atmosphere. The desk is cluttered with papers and books, and the chalkboard is visible in the background.

田中

「ふふふ、わかってるって顔だな  
校長や体育の狗山先生の調教を見せつけられて、どうせ家でシヨリまくってんだろう？  
狗山先生からどうしようもない寝取られマゾだって聞いたぞ。」

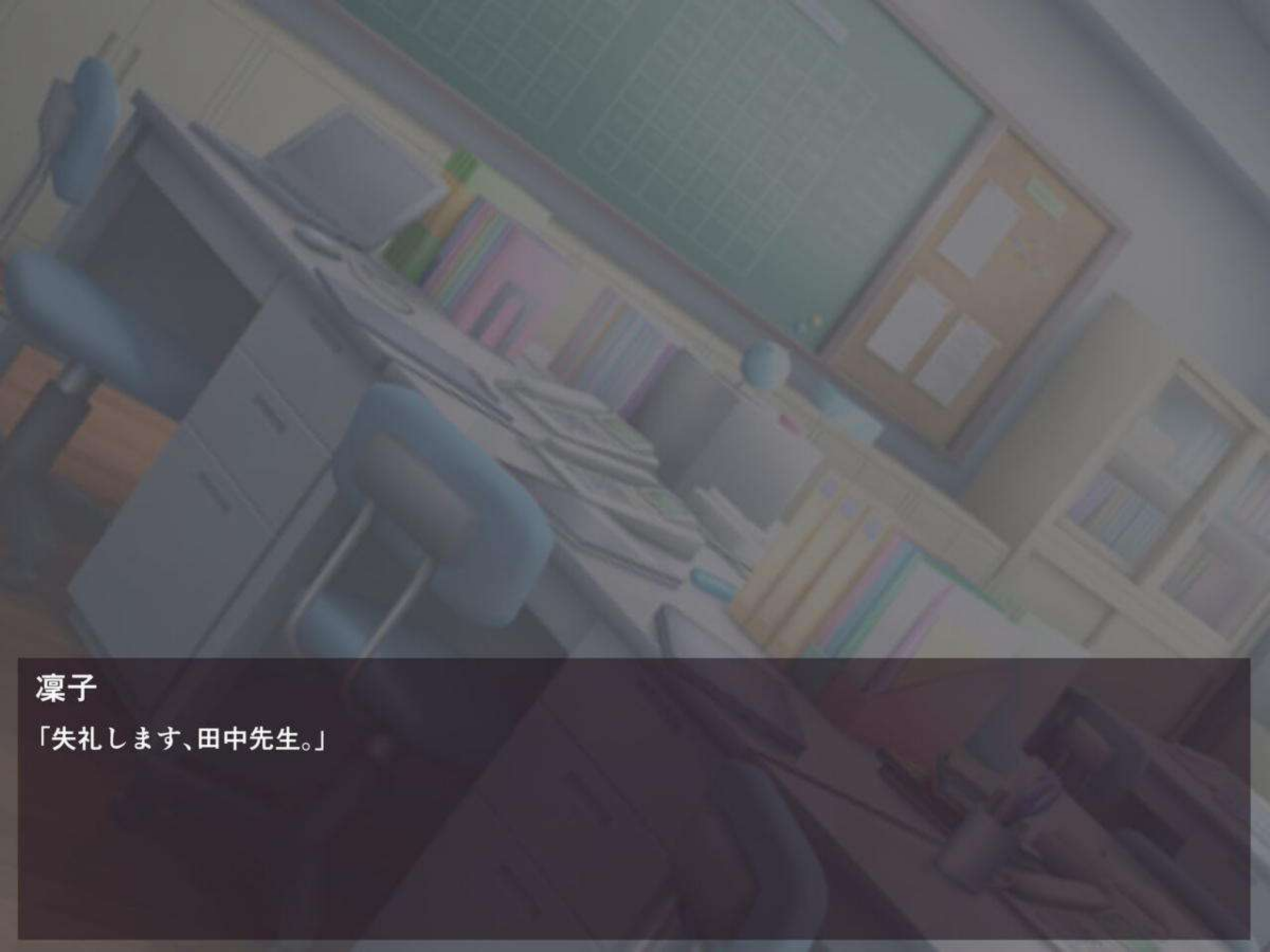


A dimly lit office scene. In the foreground, a desk is cluttered with papers and a blue office chair is positioned in front of it. In the background, there are bookshelves filled with books and a green chalkboard. The overall atmosphere is quiet and somewhat somber.

田中

「安心しろ、俺もお前の目の前で凜子を滅茶苦茶にしてやるぞ  
ホラ、凜子、入ってこい」

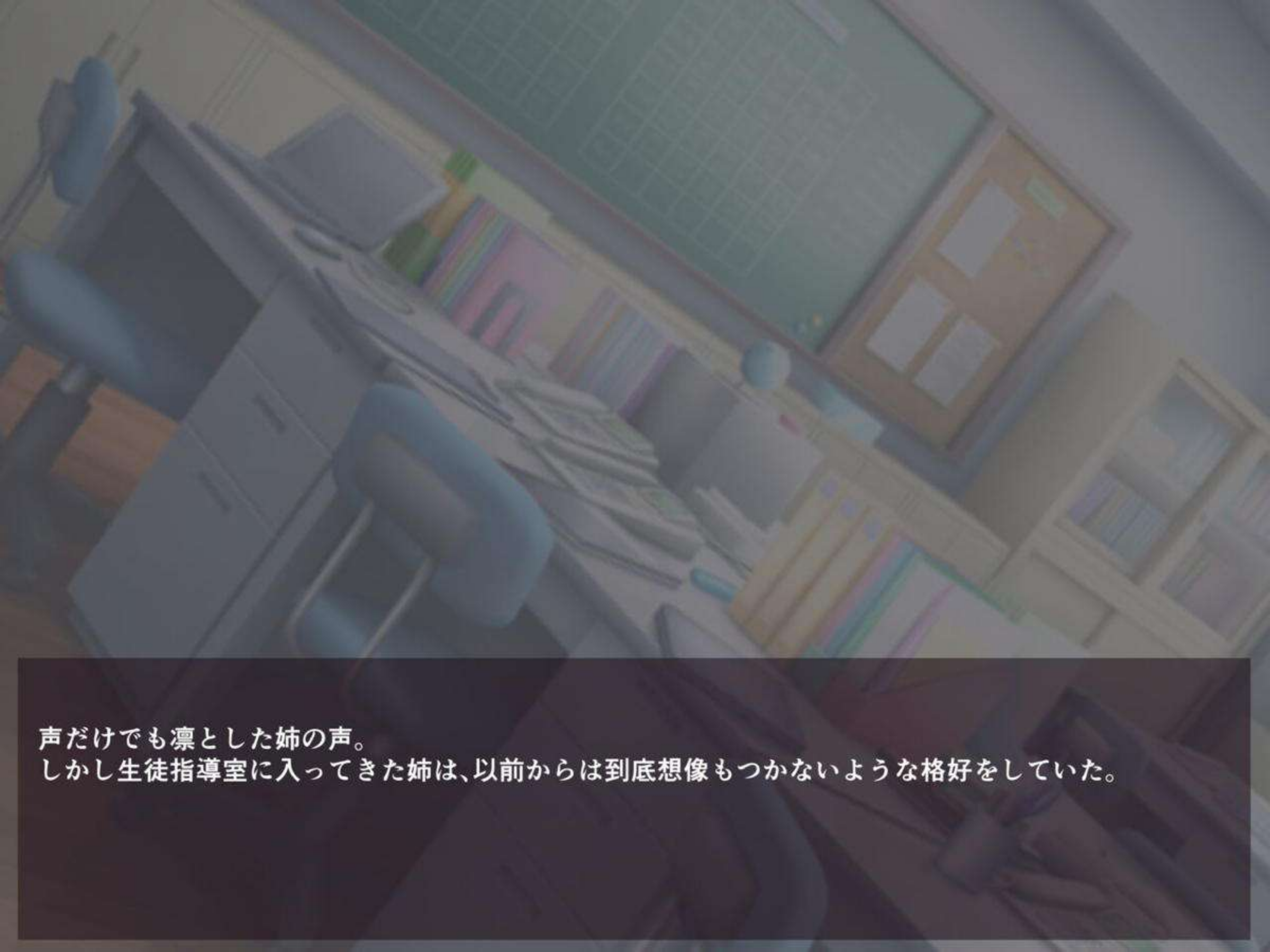




凜子

「失礼します、田中先生。」



A dimly lit classroom with a desk, chairs, and a chalkboard. The scene is viewed from an elevated perspective, showing a desk with a computer monitor and a chair on the left, and a chalkboard at the top. The room is filled with bookshelves and papers, creating a sense of a busy, quiet environment.

声だけでも凜とした姉の声。  
しかし生徒指導室に入ってきた姉は、以前からは到底想像もつかないような格好をしていた。





凜子

「田中先生、お待たせしました。  
ちゃんと渡された『新しい制服』、来て参りました。」





田中

「よしよし、ちゃんと着替えてきたな  
じゃあまずは、このカメラマンくん衣装の説明をしてやってくれ」





凜子

「かしまりました♡

ではまず——この特注のシャツ♡

男子生徒や、男性教諭の方に興奮していただけるように、乳首部分がハート型に切り取られています♡」





そういうと凜子はふるん、とその豊満な胸を揺らし、先端にぷっくりと勃起させた乳首を誇示する。





凜子

「そして、発情していただいた場合は、このシャツの上と下から、おっぱいを使ってスッキリしていただきます♥」





制服のシャツの上下の穴からむっちりとはみ出す乳肉をくばぁ、と両手でそれぞれ割り開き、まるでオナホールのように使ってください、と言わんばかりにカメラに、そして俺に見せつける。





凜子

「そして♡この雄に媚びること以外機能を果たしていないこのスカート♡  
下着ももちろん丸出しです♡♡」





スカートとは本来、下半身を覆い隠すための衣類だ。そ姉が着けているのはスカートは、腰の辺りから始まり、鼠蹊部に届かない丈で終わっている。『本来隠れているはずの部分を隠していないスカート』を履いているという事実が、履いていないよりも下品な印象を与える。また、履いている本人もその変態性に倒錯できる、というわけだ。





田中

「成程、成程。

男子生徒や男性教諭に奉仕することで学園の風紀を守る、女子生徒の正装というわけだな」





凜子

「はい♥私をはじめ、この学園の牝は全てみなさん男性のものです♥  
ムラムラ♥されたときは、いつでもどこでも、全身全霊をもってご奉仕させていただきます♥」





田中

「よしよし、ではどんな奉仕をするのか、私のチンポに実演してもらおうか」





そういと、田中はすでに固く勃起したチンポを露出させ、凜子の前に差し出した。





そういと、田中はすでに固く勃起したチンポを露出させ、凜子の前に差し出した。





田中

「よし、秋山、ちゃんと撮っとけよ！  
今からお前の大事な姉ちゃんが、全女子生徒の規範となるような“ケツ穴奉仕”を見せてくれるんだ  
からなあ！」





生徒指導教師の田中は、下品な改造制服で奉仕するよう姉に催眠をかけているのだ。左右の乳首部分をハート型に切り抜かれた極短丈のシャツに、履いている意味があるのか不明な、股まで丈が届いていないスカート。左右の手足は、彼女が対魔忍の際に着ていた装束と同じ色のぴっちりとした手袋とソックスに覆われており、全身を使って雄を誘惑する牝に成り下がっていた。





## 凜子

「で、ではあ♥今から、ドスケベ風紀委員の秋山凜子が♥全校女子の規範となるよう、『男性に校内で“ケツ穴奉仕を求められたらどうするべきか』、実演させていただきます♥」





そう言うと、姉は床に寝そべった状態から下半身を持ち上げ、膝を頭の左右で抱えることで、性器と尻を高く突き上げた体勢、すなわち“まんぐり返し”の体勢で“模範的生徒”を遂行する。





凜子

「女子生徒はぁ♡こうしてお尻の穴丸出しのパンティで♡先生方や、男子生徒の皆さんを誘惑します♡」





田中

「ほう♥中々スケベに誘惑するじゃないか。  
だが、学園の女生徒の規範を名乗るには、ちょっとドスケベ度が足りないんじゃないか？」





田中は高く突き上げられた尻をぺしぺしと軽く叩きながら、さらに無様なアピールを求める。





田中

「『どこ』に『なに』を入れて欲しいんだあ？」





田中はニタニタと笑いながら、ヒントとばかりにアナルの周りの皺を軽く撫でる。凜子姉は、急な刺激にびくん♥と大きな尻を一度跳ねさせる。生徒指導教師の意図を理解したようだった。艶のある笑顔で田中に目配せし、次に痴態を捉えるためにカメラを構えるこちらに“準備”を促す。





凜子

「凜子のドスケベアナルに♥田中先生のご指導チンポ、ぶち込んで欲しいんです♥」





くぱ♥くぱ♥と肛門を左右から指で開き、挿入孔をアピールする。





凜子

「凜子のアナル、田中先生のチンポ欲しくて♡だんだん発情腸液がぬとぬとって溢れてきちゃってます♡」





凜子姉の言う通り、開かれた肛門は内側から潤滑液を滲ませ、ひくひくと括約筋が物欲しそうに痙攣している。

この発情は催眠のせいだけなのか、それとも姉の隠された本性が表層に出てきたものなのか。





田中

「おお♥そうかそうか♥  
そんなに入れて欲しいか♥

じゃあ入れてやるから、風紀委員としてちゃんと“挨拶”、出来るよなあ？」





## 凜子

「はい♡

私、愚かにも元対魔忍の秋山凜子は♡この学園に潜入し、失敗してしまいましたあ♡  
ですが、先生方のご指導のおかげで、立派な牝備品奴隷として、調教していただきました♡  
その成果として、田中先生を誘惑するだけでだらしなくトロトロに発情したケツマンコ、田中先生  
のデカチンでお召し上がりください♡」





宣言を聞くや否や、田中は熱り立った剛直をアナルに押し当て——





どちゅんっ♡♡





どちゅんっ♡♡





凜子

「おほおおおおおおっつ♡♡♡♡♡」





姉のほかとろアナルは、十分に剛直を受け入れる準備ができていたらしく、易々と奥まで挿入を許した。  
獣のような喘ぎを上げながら、全身を歓喜に震わせる。





凜子

「イッ♥イク♥イクイク♥

田中先生のチンポでケツマンコの奥叩かれて♥

裏側の子宮までドスンって響くう♥」





田中

「おおっ♥いいぞ♥  
腸のヒダがみちみちチンポを締め上げて、精液絞り上げようとしてきおる♥♥」





田中は、挿入してしばらく姉の尻肉厚を楽しんだ後、ゆっくりとちんぽを引き抜いていく。  
そしてカリが見えるか見えないかのところまで引き抜くと——





ずちゅん♡





再び奥までチンポを突き入れる。  
田中ののしかかる体重をまるでバランスボールのように吸収する姉の体。  
声にならない軽い絶頂の喘ぎが、ふっ、ふっと漏れる。





凜子

「深い、深いのイイ♡♡

田中先生のチンポのかりで、ケツ穴の肉全部持っていられるぅ♡」





田中

「ああ♥凜子のケツマンコも最高だぞ♥

無様誘惑で発情して教師のチンポ簡単に啜え込むなんて、さすがは学園の女生徒の規範だ♥♥

ご褒美に、思いっきり動いて犯し尽くしてやる♥♥」





そう言うと、先ほどまでの深くゆっくりなピストンとは打って変わって、バランスボールの上に座って跳ねるように連続的に深いピストンを繰り返す。





## 凜子

「おおおっ♥♥♥♥

それいいッ♥♥♥ さっきよりももっと勢いよく奥まで抉り込んで♥♥♥

ケツマンコぶっ壊しに来てる♥♥♥

イク♥イク♥イクイクイク♥♥♥」





凜子

「ッ————♡♡♡♡♡♡♡♡♡」





田中

「絶頂と同時に締め付けが強くなって、俺もイキそうだっ！  
ほら受け取れ♥ケツ穴ザーメンタンクにしてやるぞっ♥♥  
受け取れっ♥♥♥」





## 凜子

どびゅるッ！ずびゅびゅるるるっ！！

ここまで聴こえるような下品な田中の射精音を響せながら、姉のケツマンコに中出しを決める。直腸の奥で静液を受け止め、絶頂の余韻に浸る凜子。





凜子

「ご、ごひどう♡ありがひょ♡ごじゃいまひた♡♡」





田中

「最高のマゾケツマンコだったぞ♥」





絶頂の余韻に震える姉の穴をパシパシと叩き、感想を語る田中だったが、最後に不穏な言葉を言い残す。





田中

「そろそろ、校長が、調教も“第二段階”に進む予定だって言ってたなあ！  
秋山、楽しみにしておけよお！」





ニタニタと笑い、俺たちを残して生徒指導室を後にする田中先生。  
俺たち姉弟の真の地獄は、ここからだった——。